

【近況報告：山のターゲットの宗旨替えをしました】（続編、兼近況報告）

七十路の峠を越えた頃から足腰がそのお役目を放棄して言うことを聞かなくなってきた。左様な次第で山行のターゲットも重いガチャ類をぶら下げて通った「岩沢幾三」方式から空飛ぶ天狗に跨って「三界六道」への異境山行に宗旨替えをしてから10年が経った。

還暦を過ぎた頃から、同じ山に登るにしても、修験古道などを辿る修験行者の真似事をして四国遍路や日本観音霊場百札所などの奥ノ院を渡り歩いた功德もあってか、今では不空大灌頂光真言*（俗に謂う光明真言）という僅か23文字の短い梵字のお経を読み、両手の掌で智拳印という印を結べば、直ちに閻魔大王の子分である大天狗が枕頭に飛来して、たちまちの内に彼岸に渡してくれるという寸法と相成った。

（ご参考 補注）『不空大灌頂光真言』*

ओं अमोघ वैरोचन महामुद्रा मणि पद्म ज्वाल प्रवर्त्तय हूं
唵 阿謨伽 尾盧左曩 摩訶母捺囉 麼拏 鉢納麼 入嚩囉 鉢囉鞞哆野 吽
オン アボキャ ベイロシャノウ マカボダラ マニ ハンドマ ジンバラ
ハラバリタヤ ウン

（「不空大灌頂光真言」曼荼羅図二種）

左側の曼荼羅には不空大灌頂光真言の梵字が刻まれている



扱て、そのような訳で毎夜毎夜此岸から彼岸に渡り閻魔大王の助手を仰せつかる身となっているが、彼岸にも休日があつて時々観音浄土の須弥山に遊ぶお許しが出る。

この異界の登山道では蓮華の花が咲き乱れ、天女様に抱かれてウツトリと過ごせる時間は此岸では味わえない醍醐味であろう。俗に謂う酒地肉林であるが、後者の方はとっくの昔に返上した。

前者の方は、最近になって新しい飲み友達ができた。皆さんもよくご存じの嵯峨天皇に仕えた平安時代のキャリア官僚で、武芸にも秀で学者・歌人としても名高い小野篁である。彼は此岸では既に1,200年ほど前に鬼籍に入った人物であるが、彼岸では1,200年などという時間はつい瞬時のことであるからまだまだ閻魔大王の代理としてご活躍中なのである。

彼は、京都の「六道の辻」というこの世とあの世の境界に当たる六道珍皇寺という寺の境内にある異界への入り口「黄泉の井戸」を潜ってこの世とあの世を自由に行き来している人物である。酒の肴に往時の宮廷の大奥の様子などを聞いているとアッという間に時間が過ぎて彼岸の赤提灯の止り木で夜明けを迎えてしまうのであった。

向こう岸での小生は毎日毎日般若湯を喰らっている訳ではなく、散歩がてらに裏山に聳える「須弥山」まで足を延ばすこともある。須弥山は、古代インド大陸にあるとされる黄金の聖山である。



この山は観世音菩薩がお住まいの
霊山で標高 84,000 由旬（126 万 km）
頂上の直径 32,000 由旬（48 万 km）
という途方もない大きさの山である
らしい。

標高は世界最高峰エベレストの 15
万倍、頂上の直径は富士山の 50 万倍
というから途方もない大きさである
ことがお分かりいただけると思う。

須弥山はサンスクリット語“スメ
ール”の音訳であり、意識では“妙
高”となるそうだが、ナルホド須弥
山の天辺から下界を見下ろすと、亡
者どもがウジャウジャと獄卒の餓鬼
共に牽かれて地獄、餓鬼、畜生、修
羅、人間、天上という六道輪廻を巡
らされている姿が望見できたが、
いずれ小生も閻魔様の助手をクビに
された暁には、六道の闇を這い蹲っ
て歩かされる羽目になるであろうが、
これも輪廻転生であるから観念せざるを得ない。



（須弥山の絵図の一例、天女も沢山翔んでいる）



（餓鬼草紙 平安時代 上記 2 画像の引用出典：東京国立博物館アーカイブ）

以上、見て来たようなナントカでした。

（2024 年 8 月 7 日 掲載）